京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **42** (2023), 1–23

身体分割と伏字
―単一発話における複数の主体について―

松田俊介

【要旨】本稿は、手話一般で広く観察される身体分割 (body partitioning) という現象を日本手話の例を題材にして分析するものである。身体分割とは、話し手の身体の各領域が別々の参与者の対応する身体部位を表す現象のことである。例えば、話し手の右手が太郎の右手を表し、話し手の左手が花子の左手を表すという現象がこれにあたる。本稿は、(i) 身体分割のマーカーを記述し、(ii) 身体分割のある種の用法が日本語の伏字と共通する動機――相反する思いを同時に伝えたいという動機――で生じているということを示す*。

【キーワード】日本手話，身体分割，伏字，ポリフォニー理論

1　はじめに

手話とは身体動作を使ってメッセージを伝達する視覚言語である。そのうち、日本のろう者コミュニティで自然発生したものは日本手話と呼ばれる[1]。

本稿は、手話一般で広く観察される身体分割 (body partitioning) という現象 (Dudis 2004, Wulf & Dudis 2005) を日本手話の例を題材にして分析するものである。身体分割とは、話し手の身体の各領域が別々の参与者の対応する身体部位を表す現象のことである。実例を見よう[2]。

---

* 本稿を執筆するにあたり、二名の査読者、編集委員の方々、西村義樹先生、石塚政行氏、木下蒼一朗氏、田中太一氏から貴重なコメントをいただいた。心から感謝申し上げる。本稿は JSPS 科研費 22KJ0652 の助成を受けたものである。

[1] 日本語では、「オリンピックの開会式に手話通訳がついた」といったように、「手話」という言葉で日本手話を指すことがよくある。この用語法は、実際には日本手話という個別言語を指しているにもかかわらずそのことを意識させないものであるため、多くの人にとって「ろう者は皆『手話』という名前の一つの言語を使っている」という印象を与える。そこから「手話という世界共通語がある」と思われることも少なくないが、これは誤りである。このような誤解を避けるため、本稿では「手話」は手話一般を指すものとしてのみ用いる。

[2] 本稿のデータは、(i) YouTube 上の実例、(ii) テレビで放送された実例、(iii) 母語話者に聞き取り調査をして得たものからなる。インフォーマントには写真掲載許可をいただいた。(i)(ii) は肖像権や YouTube の規約を考慮してそのまま載せることはしなかった。その代わりにインフォーマントに再現していただいたものを掲載した。この方略は、よく考えてみれば、音声言語の研究において音が文字化される――この過程で紙面に載る情報が取捨選択される――ことと同じであり、それほど不自然なものではないだろう。リンクは添付しているので、生のデータはそちらを参照いただきたい。本稿にある写真は左から右に見ること。

デートのとき手はどうつなぐ？
(https://www.youtube.com/watch?v=eOqfs5Sr5Ac)

0:05~
若いときにみなさんもデートしたことありますよね。そのとき (1) しますよね。
(翻訳は引用者による)

(1)　手を繋ぐ

(1) において、語り手の右手と左手は異なる人物の右手と左手を表すものとして発話されている (もし左手と右手の持ち主が同じであれば「デートのときに自分一人で手を繋ぎますよね」という奇妙な問いかけになる)。つまり (1) では、話し手の身体が分割され、その分割されたそれぞれがあたかも互いに異なる人物の身体 (この場合は腕) であるかのように働いているわけである[3]。

身体分割は手話一般で観察されるものであるが、日本手話研究においてこれが主題として論じられたことはないと思われる。そこで本稿は、日本手話の記述的研究の一環として、日本手話における身体分割を実例を通じて記述する。さらに、日本手話の身体分割のある種の用法を日本語の伏字とのつながりのもとで記述し、これら 2 つが同じ動機で生じているということを示す。本稿は身体分割のこの種の用法を「伏字用法」と呼ぶ。伏字用法は日本手話研究のみならず手話研究においても取り上げられたことはないと思われるため、本稿は手話研究一般の発展にも寄与するのではないかとの期待がある。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では身体分割のマーカーを記述する。3 節では身体分割の伏字用法を記述し、これが日本語の伏字と共通する動機で生じているという

[3] Wulf & Dudis (2005: 322) は身体分割に関して "different parts of the exact same signer's body are partitioned into zones that should be interpreted as parts of distinct entities." と述べているが、これだと手指動作で話し手の身体以外のものを表す場合は、何であれ身体分割だということになりかねず、身体分割なる概念を立てる意義がなくなってしまうと思われる。そこで本稿は身体分割を「話し手の身体の各領域が別々の参与者の対応する身体部位を表す現象のことである」とし、Wulf & Dudis (2005) の言う身体分割よりも外延を狭めた。

ことを示す。4 節では「ポリフォニー理論」という言語理論の観点から身体分割の伏字用法および日本語の伏字において観察される「主体の分裂」を考察する。

2　身体分割のマーカー

(1) を見た日本手話話者は、この形式が「自分で自分の手を握る」ではなく「恋人同士がお互いの手を握る」という意味を表していると解釈せねばならない。では、日本手話話者は身体分割が起きていることをどうやって理解しているのだろうか。その手がかりとしては、まずは何よりコンテクスト上で活性化している常識・通念――認知言語学で言うところの百科事典的知識[4]――が挙げられる。デートには異なる人物が参与する。そしてデートをしているときには彼らはしばしば互いの手を握りしめる。デート一般に関するこうした百科事典的知識がコンテクスト上で活性化されることによって、(1) では話し手の右手と左手がそれぞれ異なる人物の手を表しているものと聞き手に伝わるというわけである。

(1) 以外の実例も見ておこう。

ヒロヒゲ 101「不思議な現象」
(https://www.youtube.com/watch?v=2HM0QAtErfs)

0:07~
(2) ので振り返ってみると誰もいなかったということがありました。(翻訳は引用者による)

(2)　　肩を叩かれる

ここにおいては、話し手の左肩は話し手の左肩そのものを表しているが、話し手の右手は話し手自身の右手を表しているのではない。肩を叩くという行為は通常他人によって行われるという知識、日本手話話者は相手の肩を叩くことで呼びかけるという知識など

[4] 百科事典的意味論については Haiman (1980)、Langacker (2008: 2.1.3) を参照。百科事典的意味論と称してはいないものの、この考えを先取りした論考としては鈴木 (1973) を参照。

がこの身体分割が生じているということを理解するための手がかりとなっている。

百科事典的知識に加えてしばしば重要になるものとしては「非手指動作」を挙げることができる。非手指動作とは手や指以外の身体部位を用いて発せられた形式のことである。例えば、首や顎の動きなどが非手指動作にあたり、この種の要素によってしばしば身体分割が行われていることが (コンテクストに頼らざるを得なかった (1)(2) とは違い) 明示的に伝達される。「自分で化粧をする」と「他人に化粧をしてもらう」という日本語の下線部を日本手話に翻訳したときのことを考えてみよう。日本語では「化粧をする」「化粧をしてもらう」といったように、ル形とテモラウ形を使い分けることで「自らの手で化粧をした／していない」という情報を伝えることができる。この 2 つを日本手話に翻訳すると、それぞれ次の (3)(a)・(3)(b) のようになる。写真を見ていただければわかる通り、(3)(a) では目を開いているのに対し、(3)(b) では目を閉じていることが確認できる。ここには、自分で化粧をするときには鏡を見るという知識、他人に化粧をされるときには通常目を閉じるという知識が関わっている。化粧品がどの位置に塗られるのかを自分で制御することができない場面においては、不意に化粧品が目に入ることを防ぐために目を閉じる、ということはいかにも起こりそうなことである。こうしたいかにも起こりそうなことを話し手が非手指動作において実際に再現してみせることで、この出来事には複数の人物が関わっている——話し手の顔と腕がそれぞれ異なる人物の顔と腕を表している——ということを伝達するというわけである。

(3)

(a)　自分で化粧をする

(b)　他人に化粧をしてもらう

(3) は作例であるが、実例においても同様のことが観察される。

ヒロヒゲ 101「不思議な現象」
(https://www.youtube.com/watch?v=2HM0QAtErfs)

1:07~
寝ているときにはっきりと (4) ので､寝ぼけながら電気をつけたところ誰もいなかった。(翻訳は引用者による)

(4)　　肩を叩かれる

(4) において、話し手の上半身は話し手の上半身そのものを表しているのに対して、話し手の右手は話し手の右手を表してはいない。ここでは、話し手の目は閉じてリラックスしているのに対して、話し手の右手は強い力で上半身を叩いている。このミスマッチがこの身体分割を見抜く鍵となっている。

目の振る舞い以外にも身体分割が生じていることの手がかりとなる非手指動作が存在する。次のリンク先の動画を見ていただきたい。これは日本手話話者が日本語文を日本手話に翻訳したものであり、特に (5) は下に示す原文の下線部に相当する翻訳である。

ブレーメンのおんがくたい
(https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150535_00000)

[状況説明]
飼い主に見放されたロバがブレーメンにある音楽隊に入れてもらおうと旅に出る。その道中でうずくまっている犬に会う。ロバは犬に訳を尋ねる。

1:27~
「いったいどうしたんだい」ときくと、「ワン、ワン。おいら、よわっちまって、かりにいってもむかしのようにはしれやしない。そしたらご主人 (しゅじ

ん) さま、おいらをころそうとしたんだ。だからにげてきたってわけさ」とイヌがいいます。

(5)

(5) では、翻訳者の 1 人の身体において 2 つの主体が同時に表現されている。すなわち、翻訳者の腕や手は犬を殺そうとしている「ご主人」の腕や手を表しているのに対して、顔や首は殺されかけている「犬」の顔や首を表している。ここにおいてももちろん殺害に関する百科事典的知識——他殺という事象には異なる人物が参与する——が重要になるが、これに加えて話し手の頭が少し後ろに引かれていることも身体分割が起きていることを示す合図になる。「犬」の首が「主人」の行為によってなすすべなく後ろに仰け反ったということをこの非手指動作は表している。なすすべなく後ろに仰け反るというこの出来事は、ある人物が別の人物を絞殺しようとするときに後者の人物においていかにも起こりそうなことである。こうしたいかにも起こりそうなことを話し手が非手指動作において実際に再現してみせることで、この出来事には複数の人物が関わっている——顔と腕がそれぞれ異なる人物のものである——ということを伝達するというわけである[5]。

以上のことからわかるのは、身体分割専用のマーカーなるものが存在するわけではな

[5] この翻訳に関してはもう 2 点コメントを要する。第一に、日本語では「殺す」という具体的な殺害方法を明示しない表現が使用されているのに対して、日本手話では (5) の見た目からもわかる通り「ご主人」が数ある殺害方法の中でも絞首を試みたものとして具体的に描写されている点である。ここでこの翻訳者は、《絞殺する》という具体的な意味を表す形式で《殺す》という抽象的な概念を表そうとする比喩——提喩 (synecdoche)——を用いているのである。

第二に、日本語は「〜そうとした」であるのに、日本手話ではもう首を絞めている点である。すなわち、日本語における《殺す意図》の意味が日本手話では《殺す行為》を表す形式によって表されているということである (したがって、実は (5) はすぐさま提喩の事例であるとは言えない)。意図は行為の一種ではない (殺意は殺人の一種ではない) のだから、この翻訳は一見誤訳なのではないかという疑問が湧く。これについては検討すべきことが多いので、別稿に譲らざるを得ない (例えば、古田 (2013) にある「意図と意図的行為の特徴」や野矢 (1999) の「殺害時刻問題」を検討する必要がある) が、あえて 1 つだけ言うとすれば、この翻訳は「ブレーメンのおんがくたい」という文脈においては妥当だが、その他の文脈 (例えば刑事裁判のような未遂か否かなどが決定的に重要になる文脈) では妥当性が落ちうる、と筆者は考えている。

いということである。話し手は、自らの 1 つの身体に複数の人物が重ね合わされているということを伝達するために、自分が表そうとしている事態においていかにも起こりそうなことを非手指動作によって再現する、という方略を取る。いかにも起こりそうなことは場面によって異なるのだから、身体分割を示すマーカーも当然場面によって異なるわけである[6]。

3　身体分割の伏字用法

身体分割が起きる文脈として最も多いのは当然、複数の異なる人物が関わるときである。(1) では男女が、(5) では主人と犬が語りに登場している。この語り方は個人方言などではなく、日本手話話者の多くがごく普通に行うものである。もう 2 つ別の話し手による実例を見ておく。

アトムの時間 001
(https://www.youtube.com/watch?v=cBH8GVahhXg)

0:42~
たばこを吸いに行こうと思ったら (6)。(翻訳は引用者による)

[6] 日本手話のこの種の身体分割を日本語に翻訳するときにはしばしば受動文が充てられる。例えば、(5) はもともとは「そしたらご主人 (しゅじん) さま、おいらをころそうとしたんだ」だが「そしたらおいら、ご主人 (しゅじん) さまにころされそうになったんだ」としても自然である。(2)(4) は筆者であれば「肩を叩かれた」と翻訳する。(3)(b) は「化粧をしてもらう」のみならず場合によっては「化粧をされる」と翻訳することも可能である。ここから「日本語の受動文と日本手話の身体分割」という研究テーマを設定することができる。このテーマに対する確固たる考えが筆者にあるわけではないが、現段階の見通しを素描しておきたい。日本語の受動文が表すのは、通常主役になりがちな行為者 (agent) を差し置いて被行為者 (patient) を主役に据える、という捉え方である (西村・長谷川 2016)。一方、顔は人間の身体において注目される部分と考えられている (林 2022)。その目立つ部分の表現するものが日本手話において意味するのは、文全体が表すことの中においても目立つ――すなわち主役になる――と考えていけない理由はない。「物理的な／形式的な目立ち」が「意味的な目立ち」と符合するため、話し手の顔周辺が被行為者を表す際は、その被行為者が発話全体の表す意味において主役を担うということになり、日本語の受動文の表す捉え方と合致する、ということである。
もちろんこの説を妥当なものにするためには、日本手話では話し手の顔周辺に主役が対応しがちだということが論証されねばならない。そのためには広汎な言語現象を精査せねばならないので本稿の手に余るが、仮に論証ができれば、(2) などの例において話し手の顔周辺が被行為者を表しつつもその被行為者が意味上の主役を担っているということが導かれ、この種の表現を日本語の受動文と対応するものと見なすことができるだろう。これはあくまでも仮説に過ぎないが、実証されれば、松田 (2022) が述べている「意味が可視化されるという現象」にほかならないと言える。

(6) (服を引っ張ることによって) 引き止められた

(6) においては、話し手の上半身は話し手の上半身 (より正確には右手以外の上半身) そのものを表しているのに対して、話し手の右手は話し手自身の右手ではなく喫煙に行こうとする話し手を引き止める他者の手を表している。この語りには話し手と話し手以外の人が登場している。

2 つ目の実例である。

赤ちゃんの手話習得について[7]
(https://www.youtube.com/watch?v=gfLnL9vX7Zk)

[状況説明]
語り手は自分の子供に次の (7) の表現を覚えさせようとしている ((7) は片手を口に近づけることで表される)。その際、子供の手を直接掴んで然るべき動作をさせるという方略を取った。まさに “手取り” 足取り覚えさせるということである。

(7)

0:34~

(8)

[7] このタイトルにある「手話」は総称ではない。

(8) においては、話し手の左手は話し手の左手そのものを表しているのに対して、話し手の右手および顔は話し手自身の右手および顔ではなく話し手の子供のものを表している。ここでもやはり、語りに話し手と話し手以外の人が登場している[8]。

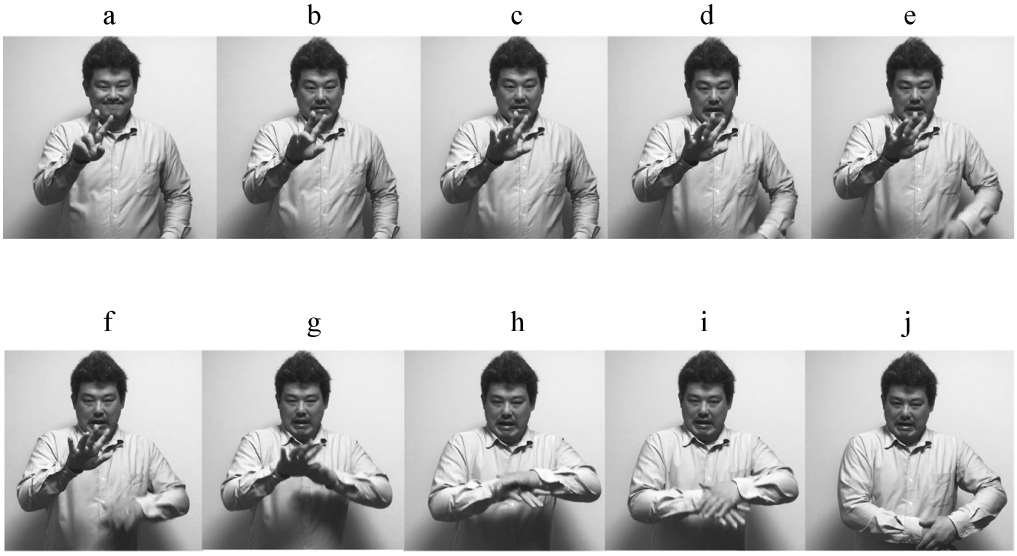
しかし、本稿が主題にしたい身体分割はこの「同じ身体に複数の人物の身体部位が結びついているというタイプのもの」ではない。以下では、「同じ身体に複数の自分の身体部位が結びついているというタイプのもの」を分析する。実例を見よう。

ヒロヒゲ 182「役員をやっていたとき」
(https://www.youtube.com/watch?v=8xGTgF2CsQY)

[状況説明]
語り手は何かの役員になっており、資料作成を担当していた。会議が始まる前に自身の作った資料に不備があることを見つけたが黙っていたところ、会議中に誰もそれに気づかなかった。

1:09~
セーフでした。(9)。(翻訳は引用者による)

(9)



[8] その他の実例は以下のリンク先の動画を参照。動画は 2023 年 8 月に確認。
https://www.youtube.com/watch?v=ajOXvpy8FbM (1:48)
https://www.youtube.com/watch?v=2ohkscZ3xFA (0:26)
https://www.youtube.com/watch?v=HDav56GZTU4 (0:36)

(9) ではまず右手を ✌ にし (a)、そのあとで右手を振ることでそれを否定 (b ~ d) し、その後左手で右手を下へと押さえ込んでいる (e ~j)。これが表す意味を記述すれば、次のようになる。すなわち、話し手の「ラッキーと言いたい」という本音と「そのようにあからさまに言うのは問題であると思っている」という建前が競合した結果、右手で本音を言ったあとにそれを否定し、建前を担わせた左手で右手を押さえ込んでいるということである。日本語に翻訳すると「ラッキー……なんて言っちゃまずいですね」といったところだろうか[9]。本稿はこの現象が書記言語における「伏字」とその特徴を一にすると考える。伏字というもっぱら書記言語に見られる現象が書記体系を持たない日本手話において観察されるという主張は、一見突飛なものであると思われるかもしれない。しかし、伏字はそれが生じる動機を考えると、相反する思いによって身体を分割するという日本手話の表現法と同じ論理のもとに捉えることができる現象なのである。

なお以下では、伏字を概説するにあたって卑猥な語が登場する。読者によっては不快感を覚えかねないことを予め断っておく。ただ、本稿はそのような感情を誘発しようという悪意に基づいて執筆されたものではなく、日本手話の言語現象を深く理解したいという筆者の純粋な学問的探究心に基づいて執筆されたものであるということをどうかご理解願いたい。

伏字とは、書記言語において何かを表す記号を明示することが憚られるときに、その一部または全体を別の記号に置き換えたり取り消し線を引いたりすることである。例えば、肛門から排泄される食べ物のカスを表すあの 3 文字は、文字にすると人を不快にさせてしまうので、「うんち」ではなく「う〇ち」と表記されることがある。他にも、自己の性的欲求をそのまま文字にして表すと、これまた人に不快感を与えかねないので、「田中さんに抱きしめられたい」ではなく「田中さんに抱きしめられ t」と書いたり (または打ったり) する。

牧 (2014: 13) によると、日本語の書記言語において伏字が登場した当時の元々の目的は、国家機関による検閲を逃れつつも、それを手に取った読者が類推によってその内容を理解することにあった。検閲制度がなくなった現在でも伏字はこの性質を備えている。すなわち現代でも、伏字は文字を秘匿しつつも、それと同時にその文字の表すべき内容を相手に伝達したいという矛盾した欲求を叶えるのに適した手段として使用されているのである (石原 2018 も参照)。相手に伝達したいという 2 つ目の欲求を満たすために取られる戦略としては複数のものが考えられる。例えば、牧 (2014) が指摘する通り、伏字は多くの場合伏せられる前の文字列の文字数に厳密に従っている。すなわち、「うんち」は「う〇ち」と伏されるが「う〇〇〇〇〇ち」とは伏されないということで

[9] このように翻訳する理由については後述。

ある。これは読者に「う〇ち」を「うんち」として理解してもらうためのヒントを与えなければならないからである。他にも、「田中さんに抱きしめられ t」の例においては、後続する助動詞「たい」の音節頭子音が明示されている。これはこのあとに「たい」が後続するということを、暗に伝えたいという欲求の現れである。「田中さんに抱きしめられ q」ではこの欲求は満たされない。伏字は「その形態のうちに判読可能ならしめるための仕組みを保持しつつ読者の前に現れてくる」のである[10] (牧 2014: 61)。

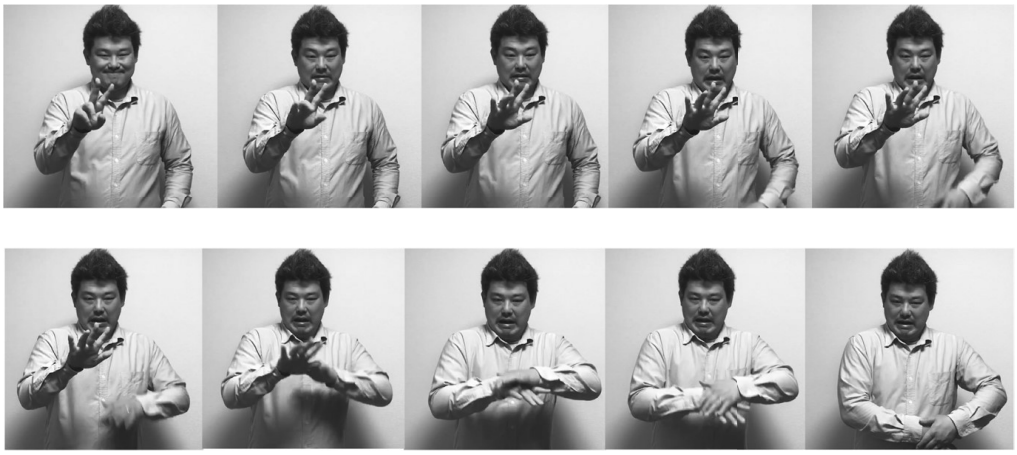
伏字のうちでよく観察されるものは、「う〇ち」「田中さんに抱きしめられ t」などのように文字列を書いた後ないしは書いている途中で他の主体によってそれが妨げられたかのように書くタイプである。自身で文字化しているにもかかわらず他の主体によって妨げられるとするのは一見奇妙だが、この用例を Twitter で検索してみると「抱かれ t…(殴」のように他の主体 (のフリをした自分) が自身を殴ったために発言が遮られたかのように表記しているツイートが多数見つかる。「う〇ち」も文字列を打ったあとで他の主体によって上から〇で覆い隠されたかのように表記しているとみなすことができる。「う〇ち」「田中さんに抱きしめられ t」などでは言いたいことが完全に文字化されていないので、本稿ではこれらの例を「不完全型伏字」と呼ぶことにする。これに加えて、本稿では「田中さんに抱きしめられたい！ なんて言えない」のように言いたいことを完全に文字化したあと、自らの建前としてその言いたい部分を否認するタイプも伏字として扱う。ここにおいては、「田中さんに抱きしめられたいなんて露骨に言うもんじゃない」と思っている (フリをしている) 自分が、「田中さんに抱きしめられたいと露骨に言ってしまった」自分を諌めている。この点で、「う〇ち」「田中さんに抱きしめられ t」のような、他の主体 (を演じる自分) によって発話が破壊されているかのように表記するタイプとは異なるが、「う〇ち」「田中さんに抱きしめられ t」であっても「田中さんに抱きしめられたい！ なんて言えない」であっても、本音を伝えたい一方でそれをあからさまに言ってはいけないという相反する思いが生み出したものである、という点では共通している。「田中さんに抱きしめられたい！ なんて言えない」は通常伏字としてみなされはしないだろうが、このような共通点があるということを考えただけでも、伏字の一種として扱うことは自然な発想であると言える。本稿では、「田中さんに抱きしめられたい！ なんて言えない」などの例を「完全型伏字」と呼ぶことにする。

以上を踏まえて日本手話の実例を見よう。筆者が日本手話における完全型伏字の事例とみなすのは上で見た (9) である。(9) では ✌ とした右手を完全に前方に出し切ったあと、それを右手で否定することで「気が変わった」ことを明示し、さらにその右手を自らの建前を担わせた左手で物理的に伏せている。筆者が先で (9) を「ラッキー……な

[10] もちろん、秘匿するためだけに使用される伏字もある。その場合は解読のためのヒントが与えられることはない。

んて言っちゃまずいですね」と日本語の完全型伏字で翻訳したのはこのためである[11]。

(9) ラッキー……なんて言っちゃまずいですね

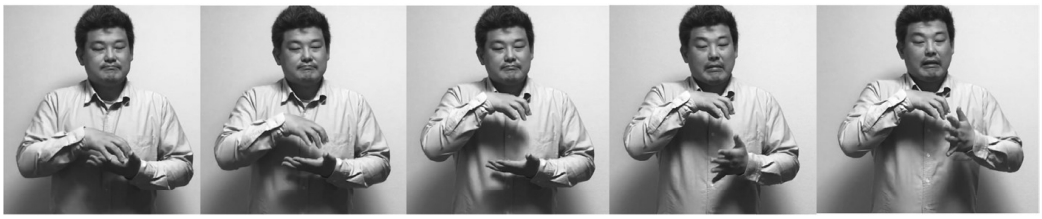


これに対して、筆者が日本手話における不完全型伏字の事例とみなすのは次の (10) である。

ヒロヒゲ 183「趣味のカメラ」
(https://www.youtube.com/watch?v=VqrshqrSZd8)

1:43 ~
(10)

a b c d e

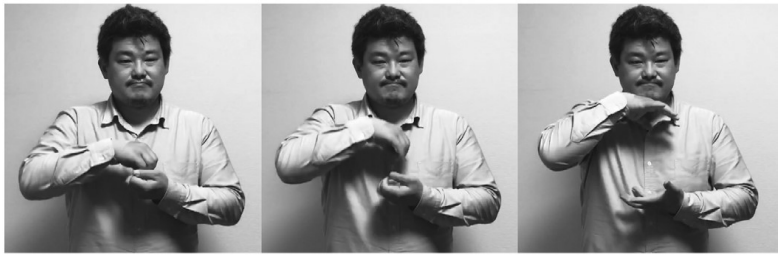


f g h i j

[11] 平沢・野中 (2023) は翻訳の妥当性の基準を、言語 A で書かれた原文を A の母語話者が見聞きしたときに得られる体験と、言語 B によるその訳文を B の母語話者が見聞きしたときに得られる体験とがおおむね揃っているかどうかに求めている。この基準に従えば、ここで行った筆者の翻訳は妥当であると言えよう。

手の動きを頼りに (10) の a～c の部分を復元するとしたら、次の (11) になる。(11) は《歳をとる》という意味を表し、右手が顎に接触する。それに対して、(10) の a から c では右手が顎に接触していない。(10) ではまず右手を顎に近づけ (a～c)、右手が顎に接触する前に左手で右手の上昇を妨げ (d ～ g)、最後は左手で右手を下へ押さえ込んでいる (h～j)。a～c では手の運動が不完全に終わっているのである。

(11)



これは、「歳をとったと言わなければならない」という伝達上の要請と「そのようにあからさまに言うのは恥ずかしい」という話し手の本音が競合した結果、右手で要請を満たそうとする直前に――すなわち右手が顎に接触する直前に――本音を担わせた左手で右手を押さえ込んでいるものとして分析できる。日本語に翻訳すると「歳をとっ t」「歳をとっ……」ほどになろう。

もう 1 つ実例を見よう。ただし、説明の都合上まずは伏せる前の表現を載せる。

(12)

6 月

日本手話での語り

(12) は全体で《6 月の日本手話語り》というほどの意味を表す。《6 月》という表現を表

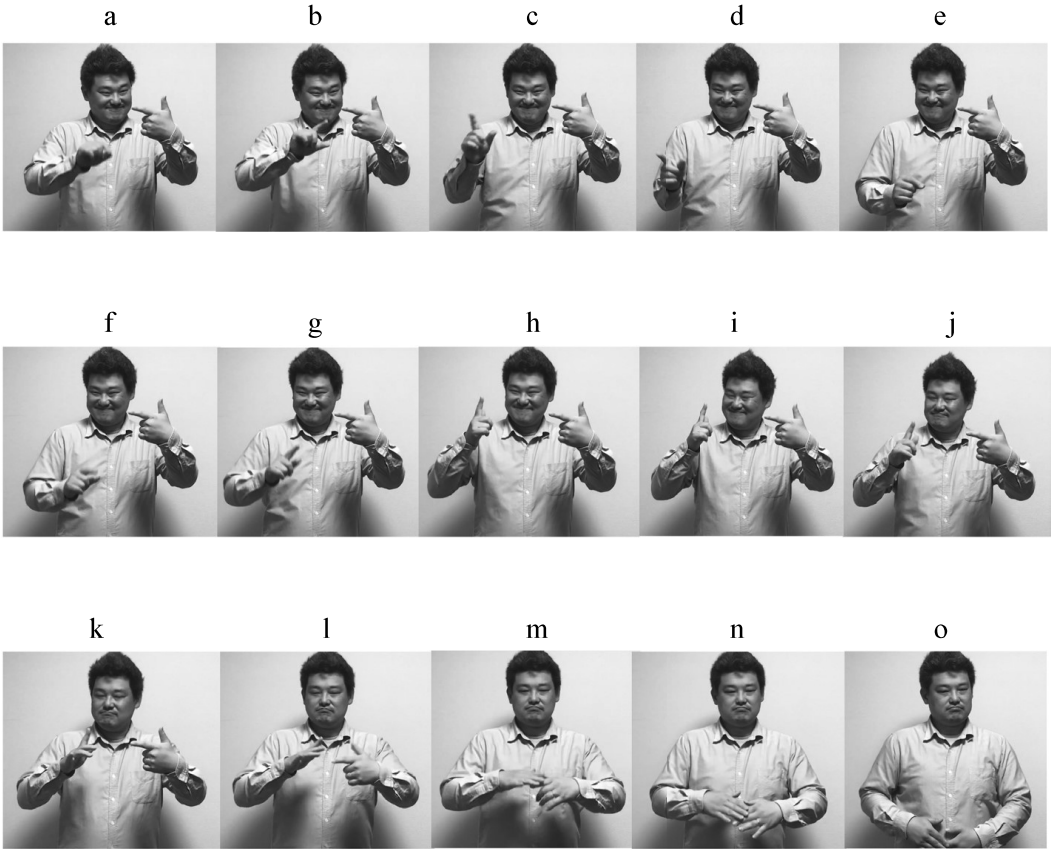
した後に、両手を にして上下に交互に動かす。この表現が不完全に伏せられる実例を見よう。

雨で事故…
(https://www.youtube.com/watch?v=dD4Locyab7A)

[状況説明]
語り手は定期的に YouTube にコラムを投稿しており、その冒頭では「n 月の日本手話語りを始めます」と宣言することが多い (n は 1≦n≦12 を満たす自然数)。2021 年の 6 月はコラムを投稿しなかった。次の (13) は 7 月に投稿された動画の一部である。6 月号が翌月の 7 月に投稿されたということである。

0:06 ~
今から (13)。ごめんなさい。6 月は動画を投稿しませんでした。(翻訳は引用者による。

(13)



(13) の a～e が《6 月》を表す表現にあたる。注目すべきは f～o である。ここでは《日本手話での語り》という意味の表現を構成する動きへと手が完全に移行していない。(13) ではまず《6 月》と表現し (a～e)、《日本手話での語り》という意味の表現へ移行しかけたときに (f～j)、右手を に変え (k～l)、その右手でもって《6 月》という表現を構成していたときの手型 のままで保たれている左手を下に押さえ込んでいる (m ～ o)。言い換えれば、右手が《日本手話での語り》という意味の表現へ移行しかけたところで、左手を押さえ込む動きに切り替わっている、ということである。これは、「あたかも 6 月号が正常に 6 月に投稿されたかのように話せば、6 月に投稿しなかったことが有耶無耶になって特に問題にならないまま話し始めることができるのではないか」という期待と「しかし視聴者に真摯に謝罪せねばならない」という誠意が競合した結果、後者を担わせた右手で前者を担わせた左手を押さえ込んだものとして分析できる[12]。日本語に翻訳するとしたら「6 月の日本手話語りを始めま s」「6 月の日本手話語りを始めま……」ほどになろう[13,14]。

ここで次のような疑問が生じるかもしれない。すなわち、なぜ (9) などの身体分割を「言いさし」(Ohori 1995, 白川 2009) ではなくあえて伏字の一種として分析するのか、という疑問である。もちろん、(9) などの身体分割は言いさしの一種として分析することは可能である (注 14 も参照)。それにもかかわらず、あえて伏字という概念を導入した理由は、言いさしと言っただけでは足りないと本稿が考えていることによる。伏字が「隠しつつも一方で伝わってほしくもあるという相反する思いを伝達する」という機能を持つのに対して、言いさしはわざと隠しているのだということ (ないしは中断したの

---

[12] 話し手の顔が笑顔から真顔に変わっていることも「期待」から「誠意」への移行を示す印となっている。また、上下に飛び跳ねる動きが、「期待」から「誠意」への移行に伴って弱まっていることにも注目されたい。段々と冷静になっていることが跳躍の減衰で表されているものと思われる。

[13] その他の実例は以下の動画を参照。動画は 2023 年 8 月に確認。
https://www.youtube.com/watch?v=YLIKdGM35xc　(1:35)

[14] なお不完全型伏字は、佐藤 (1992 [1981]) の「黙説」にあたると言える。黙説は次のように定義される。

> むかしから多くのことばのあやのひとつとして分類され、《黙説》という名称が与えられていた表現形式は、はやいはなしが、ものを言いさすことであった。何かを言いかけて、途中でやめてしまう、そして、あとは言わなくてもわかってもらえるだろう……と、一応の期待をすることである。
>
> 佐藤 (1992 [1981]: 21)

ただし、不完全型伏字と黙説は発話を中断するという点において共通しているが、この 2 つの外延は完全に一致するわけではない。不完全型伏字はあたかも他者によって遮られたかのように振る舞うものであるのに対して、黙説はこのような他者性の有無を問わないものと考えられる。

だということ) を話し手が伝えようとする必要がないからである (もちろん、伏字と同様に伝えようとしていてもよい)。つまり、伏字が持つ「相反性」を言いさしは必ずしも持たないということである。この点を捉えるために、言いさしではなく伏字とのつながりのもとで身体分割を記述した[15]。

4 ポリフォニー理論

書記言語にこだわらず日本手話も視野に入れて伏字を特徴づけるとすれば、それは「単一の発話において、ある主体が言ったことを別の主体が遮る・否定する現象」ほどに一般化することができる。平たく言えば、伏字とは単一の発話を複数の主体が成立させるという現象なのである。伏字をこのようなものとして観察することは、発話というものが 1 人の話し手によって行われるという素朴な直感に反するだろう。しかし、主体の分裂は日常会話において決して珍しいものではない。このことを「留守番電話のパズル」と呼ばれる古典的問題を通して確認しよう。(14) には I, here, now という指標詞が含まれている。I は話し手、here は発話が行われた場所、now は発話が行われた時を表す。

(14) I'm not here now.

ある話し手がこの文を発話したときに、その者はまさにその発話が行われた場所・時点に存在するのであるから、この文は誰が発話しても間違ったことを主張する文であるということになる。しかし、次のような文脈では、(14) は間違ったことを主張する文には聞こえない。すなわち、電話の持ち主がその電話に予め "I'm not here now" と録音しておき、その音声が電話の持ち主が留守だったときに再生され、それを電話をかけた人が聞いたという文脈である。この文脈においては、(14) は電話の持ち主が電話の近くにい

[15] 査読者から、本稿で扱った身体分割を「言いさし、言いよどみ、言い直しではなく、伏字の一種として議論するべき理由が明確でない」というコメントをいただいた。もちろん、言いさしの事例として分析してもよいが、その場合言いさしの下位分類として上記の「相反性」を有するタイプを立てる必要がある。そしてそれは、本稿で言うところの伏字に該当すると思われる。したがって、「言いさし」という用語をあえて使うのであれば、「言いさしの伏字用法」という名前を本稿は与えることになる。

さらに査読者から「『独話における話し手の自我の分裂』という大きい括りの中の下位分類として、日本手話では身体分割を、そして、日本語では言いさし、言いよどみ、言い直し、(機能拡張された) 伏字を同等に位置づけるのが妥当ではないか」というコメントをいただいた。本稿も身体分割と伏字を同等に位置付けることに異論はないが、言いさしと伏字を同等に位置付けるという見方は採用しない。むしろ、言いさしの下位分類として伏字を位置付けるべきであると考える (注 14 も参照)。

ないという事態を正しく描写しているように聞こえる。ここから、(14) が正しく理解されるのは、(14) を話し手が録音しているまさにその瞬間ではなくて、その録音が録音時点から見た未来の然るべきときに再生されたときである、ということがわかる。したがって、録音している段階の話し手は「その未来において留守にしていて応答できない自分」に成り代わってセリフを言ってあげているのである。つまり、話し手が「過去の自分」に「現在の自分」を演じさせているという状態にあるということである。このことに関しては、木下 (2021) の次の記述が示唆的である。

> いま仮に、私の家の固定電話に発信したアリスが [(14)] の自動再生を聞いたとしよう。しかし私は家で仕事をしており、所謂「居留守」の状態が成立している。この状況でアリスが私の「居留守」を知ったとすれば、アリスは誰を責めるだろうか。もちろん音声を録音した過去の私ではなく、現に在宅している私の方であろう。 (木下 2021: 41)

留守番電話の文脈においては、録音をしている主体とその録音の内容に責任を負う主体が別の人になりうることを木下 (2021) は指摘している。こうした主体の複数化は、話し手が何かを演じているときに一般に現れる特徴である。(14) に即して言えば、「過去の自分」は「現在の自分」に代わって (14) と言わされているだけの「役者」(木下 2021: 41) に過ぎないというわけである。

上記のような「単一の発話における主体の複数化」はいわゆるポリフォニー現象と称されるものであり、それを取り扱う理論は「ポリフォニー理論 (the theory of polyphony)」と呼ばれる[16]。ポリフォニー理論とは、Mikhail Mikhailovich Bakhtin が小説の分析のために考案し、後に Oswald Ducrot が言語分析のために再整備した理論のことである (Ducrot 1984, 2009)。教科書的な語用論では 1 つの発話につき 1 つの発話主体しか想定されないのに対して、Oswald Ducrot は否定・アイロニー・自由間接話法・エコー発話などの十全な記述のためには複数の主体を立てる必要があると訴える。その複数の主体とは、発話を物理的に発する者 (sujet parlant; S)、その発話の責任主体 (locuteur; L)、発話主体が発話内部に設定する様々な視点 (énonciateur; É) である (大浜 2005)。例えば、手術同意書は、その文面[17]を作成したのは病院 (で働く人) であるが、そこに署名をして同意とい

[16] 渡邊 (2015) によると、ポリフォニー理論は日本においてはフランス語学でしか知られていないとのことである。

[17] 例えば「私＿＿＿＿＿＿は、このたび、現在の疾病の診療に関して、担当医から下記の説明を受け、十分に理解いたしましたので、貴院にて手術を受けることに同意いたします。」のような空欄を含んだ文面である。患者はこの空欄に自身の名前を記入し、同意という行為を行うことになる。

う行為の責任を負うのは患者であるため、ここにおいては病院が S となり患者が L となる。日常的な会話では、S と L が分離することはあまりないが、同意書などの書き言葉ではごく普通に起きる。

次に L と É が分離する例を見よう。花子と太郎が言い争いをしているとする。花子が「太郎のバカ！」と言ったのに対して、自身をバカだとは思っていない太郎が「そうだよ、僕はバカだよ」と返答したとする。ここにおいて、太郎は「自身をバカだと評価する」という言語行為を自らの責任で行う主体であるという点で L であるが、「太郎はバカだ」という判断を行うための視点は太郎ではなく花子のものであるため花子が É となる。そして、L である太郎自身は É である花子が提供した視点を発話内部に設定しつつも、それを的外れなものとし、その視点を自らのものとすることを拒否する、すなわち距離を取ることで「アイロニー」を生じさせている。これを図示すると図 1 になる。図中の “←” は視点を表す É から言語行為主体 L が離反することを表す[18]。

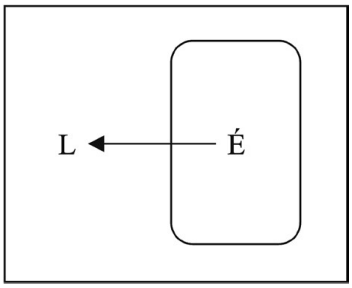


図 1: アイロニーにおける主体の分裂

アイロニーはこのように L が É から距離を取るタイプのポリフォニーであるが、反対に L が É と同化するタイプのポリフォニーも存在する。単純な否定文がそれである。例えば、「ピエールはいいやつじゃない」という否定文においては、「『ピエールはいいやつ』という主張を行う」という É1 と、「『ピエールはいいやつじゃない』という否定を行い、É1 と対立する」という É2 が設定され、L は É2 に同化する。これを図示すると図 2 になる。“→” は視点との同化を、“↕” は視点同士の対立を表す[19]。

---

[18] 外側の長方形および内側の角丸長方形の詳しい意味については大浜 (2005) を参照。ここでは視点の置き場程度のものとして理解していただいてかまわない。

[19] Ducrot が É2 のみならず É1 も立てる理由は次の (イ)(ロ) の容認性に差があることによる。

(イ) Pierre n’est pas gentil. Au contraire il est détestable.
[ピエールはいいやつじゃない。それどころかひどいやつだ。]

(ロ) ? Pierre n’est pas gentil. Au contraire il est adorable.
[ピエールはいいやつじゃない。それどころか素晴らしいやつだ。] (大浜 2003 (訳))

(イ) は自然であるのに対して (ロ) は不自然である。この事実を Ducrot は É1 を設定すること

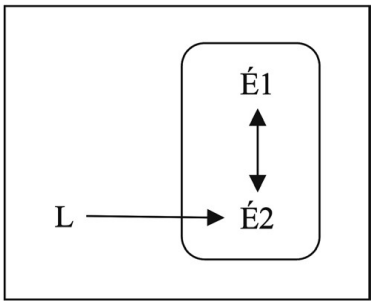


図 2: 否定における主体の分裂

以上を踏まえて (9) を分析してみると、面白い現象が起きていることに気づく。(9) では、「ラッキーと言いたい」という本音の視点 É1 と、「そのようにあからさまに言っては問題である」という建前の視点 É2 が設定されている。そして、L は本音を隠しているのだから É1 から離反し建前である É2 に同化するのだが、それと同時にその本音が伝わって欲しくもあるのだから É1 にこっそり同化もしているのである。図示すると図 3 になる。

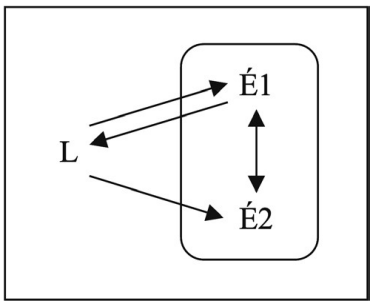


図 3: (9) における主体の分裂

この「本当は同化していることを明らかにしつつも、離反してみせる」ということが「とぼけ」「ふざけ」の効果を生む。そして、これを聞き手が (意識的にであれ無意識的にであれ) 正しく理解するからこそ、(9) が持つ相反性が適切に伝わるのである。この特徴は伏字――とりわけ不完全型伏字――にも同様に見られる。実際、「う○ち」と書いた人に「なぜそんな下品なことを言うのか！」と言って責めたとしても「いやいや、あなたが勝手に○に “ん” を入れただけでしょ？」と言ってとぼけ、責任逃れをすることは

で説明する。すなわち、逆説の連結詞「それどころか」が受けるのは「否定発話の内容ではなくて、その背面にある断定、すなわち E1 の視点 (「ピエールはいいやつだ」) 」であるため、「E1 と同じ方向性を持つ [(ロ)] の「素晴らしいやつだ」は、逆説の連結詞「それどころか」で接続させることができない」と説明するのである (大浜 2003: 75)。

可能であろう。

上述した太郎の「そうだよ、僕はバカだよ」という返答では、主体の複数性は意味という不可視のものに基づいて確認されていた。しかし、日本手話の身体分割ではこの複数性が形式——目に見える身体動作——で確認できる。そのため、ポリフォニー理論の妥当性が直感的に把握できるわけである[20]。これは松田 (2022) が述べている「意味が可視化されるという現象」にほかならない[21]。これまでの言語理論は音声言語を基盤にして創始されたものが多いが、日本手話も考察対象に入れることでモダリティの垣根を越えた検証が行われ、理論言語学がさらに発展するのではないかとの期待がある。

参考文献

石原若奈 (2018)「2 ちゃんねる「同人板」の「伏字」: 計量分析から見る変形の特徴」『現代日本語研究』10: 35−52.

大浜博 (2003)「ポリフォニーの二つのタイプについて : DUCROT 理論の批判的検討の試み」『言語文化研究』22 (2): 65−83.

大浜博 (2005)「デュクロのポリフォニー概念の問題点について : 否定アイロニー発話の解釈をめぐって」『フランス語を探る : フランス語学の諸問題 III』293−305. 東京 : 三修社.

木下蒼一朗 (2021)「「約束」再訪」『東京大学言語学論集』 43: e1−e48.

佐藤信夫 (1992 [1981])『レトリック認識』東京 : 講談社.

白川博之 (2009)『「言いさし文」の研究』東京 : くろしお出版.

鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』東京 : 岩波書店.

西村義樹・長谷川明香 (2016)「語彙、文法、好まれる言い回し : 認知文法の視点」藤田耕司・西村義樹 (編)『日英対照　文法と語彙への統合的アプローチ : 生成文法・認知言語学と日本語学』282−307. 東京 : 開拓社.

野矢茂樹 (1999) 『哲学・航海日誌』東京 : 春秋社.

林隆介 (2022)「顔認識」『図説　視覚の事典』東京 : 朝倉書店.

平沢慎也・野中大輔 (2023)「認知文法から考える「意訳／直訳」問題 :「直訳」は本当に「直」なのか？」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』77: 51−94.

古田徹也 (2013)『それは私がしたことなのか : 行為の哲学入門』東京 : 新曜社.

牧義之 (2014)『伏字の文化史 : 検閲・文学・出版』東京 : 森話社.

[20] だからと言って、日本手話 (ないし手話一般) が音声言語よりも優れていると言いたいわけではない。

[21] ここの議論では、日本手話の記号を構成する形式と意味とが直接的な関係を結んでいる——すなわち類像性を有する——ということが前提となっている。

松田俊介 (2022)「日本手話における「変化で属性を表す」メトニミー」『京都大学言語学研究』41: 1–17.

渡邊淳也 (2015)「論証的ポリフォニー理論をめぐって」川口順二 (編)『フランス語学の最前線 3』275−304. 東京：ひつじ書房.

Ducrot, Oswald (1984) *Le dire et le dit*. Paris: de Minuit.

Ducrot, Oswald (2009) *Slovenian lectures: Introduction into argumentative semantics*. Ljubljana: Pedagoški Inštitut.

Dudis, Paul (2004) Body partitioning and real-space blends. *Cognitive Linguistics* 15 (2): 223−238.

Haiman, John (1980) Dictionaries and Encyclopedias. *Lingua* 50: 329–357.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Nølke, Henning, Kjersti Fløttum and Coco Norén (2004) *ScaPoLine: La théorie scandinave de la polyphonie linguistique*. Paris: Kimé.

Ohori, Toshio (1995) Remarks on suspended clauses: A contribution to Japanese phraseology. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Tompson (eds.) *Essays in Semantics and Pragmatics*, 201–218.

Wulf, Alyssa and Paul Dudis (2005) Body partitioning in ASL metaphorical blends. *Sign Language Studies* 5 (3): 317−332.

参考動画 (本文に写真を挙げたもの。動画は 2023 年 8 月に確認)

岡山県聴覚障害者センター手話動画配信 (2014 年 10 月 15 日)「ヒロヒゲ 165『デートのとき手はどうつなぐ？』」YouTube. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=eOqfs5Sr5Ac

岡山県聴覚障害者センター手話動画配信 (2012 年 3 月 2 日)「ヒロヒゲ 101『不思議な現象』」YouTube. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=2HM0QAtErfs

岡山県聴覚障害者センター手話動画配信 (2015 年 4 月 15 日)「ヒロヒゲ 182『役員をやっていたとき』」YouTube. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=8xGTgF2CsQY

岡山県聴覚障害者センター手話動画配信 (2015 年 4 月 25 日)「ヒロヒゲ 183『趣味のカメラ』」YouTube. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=VqrshqrSZd8

サインアイオー (2021 年 7 月 1 日)「赤ちゃんの手話習得について」YouTube. Retrieved

from
https://www.youtube.com/watch?v=gfLnL9vX7Zk
砂田アトム (2021 年 7 月 8 日)「雨で事故…」YouTube. Retrieved from
https://www.youtube.com/watch?v=dD4Locyab7A
kansaishuwawa (2012 年 9 月 27 日)「アトムの時間 001」YouTube. Retrieved from
https://www.youtube.com/watch?v=cBH8GVahhXg
NHK for School「ブレーメンのおんがくたい」Retrieved from
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150535_00000

Body Partitioning and *Fuseji*: Multiple Subjects in a Single Utterance

Abstract

This article analyzes body partitioning, a phenomenon widely observed in signed language in general, as it is manifested in Japanese Sign Language. Body partitioning occurs when different parts of the speaker's body are used in a single utterance to represent the corresponding body parts that each belong to different participants (e.g., the speaker's right hand and left hand correspond to Taro's right hand and Hanako's left hand, respectively). After describing how body partitioning is indicated in this language, this article shows that one of the uses of body partitioning arises from the motivation it shares with Japanese *fuseji* (euphemism in written language which replaces or deletes graphemes), i.e., the motivation to convey conflicting thoughts at the same time.

Keywords: Japanese Sign Language, body partitioning, *fuseji*, the theory of polyphony

受領日　2023年4月14日
受理日　2023年7月9日